



顔をあわせて話す場を重ねる意味

園長 野中 泉

「今悩んでいることは、小1の壁。下の娘が卒園したら、また小1の壁がやってくる。保育園のように夜10時までなんて預かってくれるところはどこにもない。うちは、父親と母親だったら、母親のほうが子育てのために仕事をセーブすべきって、夫はそういう考え。おばあちゃんも母親が子どもといてやれるときは今しかないんだからそうしなさいっていう。今の職場は理解があって、時間が短いパート勤務を認めてくれて、子どもが病気のときには休ませてくれる。でも、私は、モヤモヤしてる。なんで、最初から母が休んで当然なの？仕事が好きなのに、若い常勤の子みたいにパートでは大事な仕事は任せてもらえない。母親だったら、それは仕方ないことなのかな」

これは、先週の金曜日の夜にあったみかん組の懇談会で、『なんでも話したいことを話そう』という担任のよびかけに、口火をきってひとりのお母さんが話してくれた内容です。彼女の必死な気持ちに、「とても共感する」、「いや自分は違う考えだ」と参加の保護者たちからはいろいろに反応があったのですが、私が胸うたれたのは、そんな彼女にそこに居合わせた10人ほどの仲間たちが口々に「お兄ちゃんが小1になるときも同じように悩んでたよな」「そうそう、すいか組になる直前のぶどう組の懇談で話してくれたこと、よく覚えてるよ」と声をかけたことです。

他人の家庭の話を、ごく親しい友人だけでなく、クラスのみんが当たり前のように知ってくれていること。その時々葛藤を聞いてくれた仲間と、その後も何年もの間一緒に子育ての時間を重ねていること。卒園間近のみかん組の懇談だからこそたどり着いているその光景に、アトムが個人懇談ではなく集団としての懇談会にこだわってきたことの意味をひとつ見せてもらった気がしました。

その夜の懇談会では、正直に自分の気持ちをさらけ出してくれた彼女に励まされたように「大人になってから友だちになることの難しさ」や「他人の何気ない無視や無関心に傷つけられた経験」反対に「知らない間に自分の行動が誰かを傷つけてしまった出来事」などが、とても正直につぎつぎに切れ目なく語られました。深いけれど飾らない言葉が続いたその夜の様子を私の拙い文章力では伝えきれないのが残念なのですが、懇談が終わる間際、まだしゃべっていない人もどうぞと話をむけた担任の声掛けに答えて、こんなふう話してくれたひとりのお母さんがいました。

「私は、人前で話すのがすごく苦手で、懇談は何年たっても、こんなふうになんかしゃべらなければいけない順番が来ると思うと緊張するんです。でも、人の話を聞くのは好きで。みんなが話している話をうんうんわかると聞かせてもらっているのが、実は楽しい。だから、行きの車は緊張で少し気が重くても、毎回懇談の帰り道のハンドルは軽いんです。なんかこの場の空気に元気をもらうのかな」。

「いい懇談会」に同席させてもらおうと、その度にその良さをその場にいなかった人に伝えたくくなります。でも、それはやっぱり毎回あまりうまくいきません。その時の言葉を全部録音して文字起こししたとしても、やっぱりうまく伝わらないだろうなと思います。その時に、話をしていた人だけでなく、それを聞いていた仲間たちが、どんなふうに頷いたり、考え込んだ顔をしてそれを聞いていたのか。そんな様子もぜんぶひっくるめて「その場の空気感」を伝えきれないからです。

その時間、その場に居合わせることでしか伝えられないことが、やっぱりまだある。そんなことを、もう一度思う夜でした。